

めんどじいさんおんぼろもどろじいさんおんぼろ遊び

宮本 和典

見える方がオモシロイ

「今日ビビッたでー、だつてオレの前でおばあちゃん泣きだすねんもん」「えー、うちの前でもどっかのおばちゃんハンカチもってふいててんでー」
二〇〇〇年八月二十八日大阪市東住吉区の駒川まつりでの太鼓演奏後の子どもらの会話より。

ドンドコドコンドンドンドン、ヤー！ うちの

（学童）クラブで和太鼓に取り組みはじめて今年で十年。ずっと子どもらの心と身体を捉えて止まない。今では年に数回、地域の保育所や商店街のおまつり、区の成人式などで演奏活動を行っている。

きっかけとなったのは、たまたま僕が和太鼓に興味をもち、習いに行つたこと。あんまりオモシロイし気分爽快だし、身体的にも快なので、ある時、クラブの子ども達に、「やってみたいヤツ」と誘い

かけたのが直接のきっかけ。五、六人の子どもが「やりたーい」と声をあげてくれた。

が……、太鼓がナイ。太鼓屋さんに電話して聞いてみると……「えっ、そんなに高いんですか……」。それから古道具めぐりをはじめた。四天王寺さんの市にも行ってみるが、ちよつと手に届きそうにない。保護者会の折に、そのことを話した。「はよいや。うちに一台あんのに、それ使いいや」「ほんまですかー」。一尺四寸の太鼓が手に入った。さっそく自分の習いたての「祇園太鼓」を、近所の長居公園でたいた。「しんどいけどオモロイわー」その時の子どもらの声。

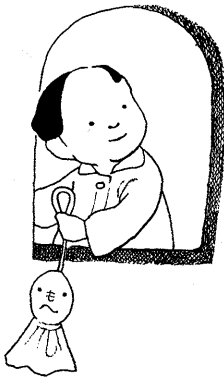
太鼓に参加しなかった子どもらは、遊びながらもチラチラと、太鼓の練習をしている子どもらが気になりだした様子。「やってみるかー」。一回目のお誘いには、「いらんわー」必ず遠慮がちに言葉を返してくる。やりたそうな気持ちは丸見え。未知のモノ

だけど、いつも一緒に遊んでる仲間が、ナニやらオモロそうにやってるのを見ると気にならないはずがない。

二年目、こちらの方から子ども達に誘いをかけて「おまえらやってみいひんかー」「やりたい」。

ということ、自分がオモロイと思つてやりはじめたことが、子どもらの取り組みとなつていった。

和太鼓＝楽器ということから、学校での教科で分類すると「音楽」ということになりそうなんだけど、これはどう思い直してみても、「体育」だと断言できる。肉体を駆使するむちゃくちゃしんどい行



為なのです。五分も太鼓をたたくと「ハーハー」息があがります。打ち終わったあととまちがいなく筋肉痛になるんです。だから必ず事前に三十分くらいかけてゆっくりと体をほぐす体操をしてからたたく行為にうつるんです。これだけで十分しんどいことなのに子どもらは頑張っちゃう。「さあやろかー」必死になってたたきだす子どもら。何がイイって、その顔がメチャイイんです。学校でもあんまり光れへんやつ、クラブでもそんなにそんなにハリきった生活してへんやつまでもが、真剣な顔つきにどんどんなってくる。額に汗をにじませながら、どんどんカッコイイ顔に変わってくる。やればやる程に際立ってくる。思わずその顔に見入ってしまい魅せられる。ふと現実には立ち直つてみると、あんなにしんどいことをものすごく一生懸命にやっている子どもたちに感銘をうける。

自分がオモシロクてやりだした和太鼓だけけれど

も、子どもら在必死になってやっている姿を見てる方がずっとオモシロクなってきた。

太鼓のかくれた魅力

この太鼓の活動、一年中毎日やってるわけじゃもちろんない。基本的には、春から夏にかけて週に一回か二回の取り組みである。

ある時、子どもらのこの和太鼓の取り組みを見ていた父母が、「是非とも発表の場を、でないともつたいない。それに子どもらも、もっと励みがでるだろう」と、地域のお祭りへの出演の話をもってきた。ここで大うけ。子どもらも、緊張感をもって事に挑む快感を知った。話が話呼んで毎年、年に多い時で十回くらい演奏する機会を得ている。

どこへ行つても必ず人を泣かしてしまう。おじいちゃん、おばあちゃんに限らず、若い人も「鳥肌立ちました」などと感動してくれる。

地域の商店街のお祭りの時、中学生くらいのオシヤレした女の子たちが通りすがりに立ち止り、真剣な顔で子どもたちの演奏に見入っていた。二、三年前の話だけど、長居公園で太鼓の練習をしていると、二時間程じっと見ていたホームレスのおっちゃん、十五本の缶ジュースをもって「先生これ子どもたちに飲ましたって」と差し入れてくれたことがあった。

子どもらの太鼓を聴いて、「自分もやりたい」と言う人はたくさんいる。まずお母ちゃん達、お母さん、ライオンズクラブのおっちゃん、音楽教師 e t c. いちばんハリキるのはお母ちゃん、えらいパワーでガンガンやって筋肉痛。音楽教師はすぐリズムをおたまじゃくしを用いてメモをとる。保母さん達はとても素直な感じ。一番理屈のいらんのがおっちゃん達。「オー難しいのう」で終らせるが練習後に一杯やりながら今日の練習の話が盛り上る。



▲ドンドコドコンコドンドンドン、ヤー!

去年の暮、ルミアスというショッピングモールでのイベントがあった。この一年間のステージ出演者（約一〇〇チーム）の中から十チームが出て年間グランプリを決める「ルミアス大賞決定戦」というもの。わが「かぶと組」（対外的な演奏活動をする時のステージネーム）もその中に選ばれた。ロックありゴスペルありダンスあり、と異ジャンルの闘い、太鼓をたたいて勝負するというのは初めての体験。

「兄ブー（私の呼び名）賞金とか出るのん？」「でるみたいやでー」「もし優勝したらみんなでハワイ行けるかナー」「じやろなー」子どもらは意気盛んで担当の方から進行表を頂いた。一ページ目をめくってみると、「優勝賞金五〇〇〇〇〇円」「うん！」子どもらの控室へ走って行ってページをめくる。途端「よっしゃー」叫ぶ子ども達。いつも以上の気合が伝わってくる。さあ時間、六階から一階へ向うエレベーターの中で「うりゃー」と叫ぶ子ども達。もの

すごくイイ出来。ひよっとしたら……。

「それでは発表です」「三位は……」「よかったー」心臓ドキドキ座りこんで体をかかえる子ども。「二位の発表です」チラリと司会の方が子どもらの方を見る。ドキッ。「オレらかー、二位かよー」「さて、二位は……です」。ギョエツ！……オレら優勝か……緊張はピークに達した。「それではグランプリの発表です。グランプリは……〇〇です」。

ガクーみゝんなその場に倒れてしまった。涙ぐむ子どもらを励ます言葉は何もなかった。僕もこの時本気でガッカリした。しかし、これだけドキドキしたり、おもいっきり落ち込んだりの経験ができたというのが貴重な体験だった。

遊びでなくちゃ

見ている側もたたく側もがこちよく素直に「ええなー、やりたいー」と思えるのは、何でなのか。

時々ふり返って考えるのですが、それはまず第一に
“和太鼓” そのものもつ魅力があると思うので
す。そして、第二には、これが大事なことだと思う
のですが、“遊び” だということです。

① リズムにのって身体動かすのが楽しい

② できなかった技を習得した時の快感

③ 曲として組みあがっていくプロセスのワクワク感

④ 複数の人間が寄りあい互に力を発揮することに

よって得られる楽しみの増幅

ほらね、こうやって書いてみると、“遊び” を定
義してみたいでしょ。

ビー玉するにしてもコマ回しするにしても、ドッ
ジボールするにしてもそうだけど、技術の向上なく
してはオモシロさは開拓されていかない。ファミコ
ンもそうかも。技術レベルが上がってくると、とて
も楽しい。太鼓も、複数であったり単数であったり
する他人のリズムの上ののっかって、自分のリズム



▲ルミアス ステージの“かぶと組”

をラッピングさせていく。少々遊んだりしながら……。こんなふうになるとほんとうにオモロイ。かつ、演奏会なんかで観てくれている人と一体になってその都度生まれてくる空気を感じるのがまたオモシロイ。

このオモシロさを知った子ども達は、「またやろうや」ということになる。しかしこのオモシロさを味わうためには、時間もかかるし努力もいる。

先に述べたように太鼓をたたくということは、とてもしんどいことだ。せつかくこんなにしんどいことをさせるのだから絶対子どもには、オモシロさを味わってほしい。そのためには時としてキビシイ練習も必要なのです。しかし最近、僕の方は楽になってきた。OB達に言わずと甘くなったのだそうだが、十年もやっていると、必ず年下の子ども達は、上の子どもらを見ている。そこに「あこがれ」が生まれる。僕もあこがれることがありますよ。だって素

直にカッコイイもん。

だから最近では、盛りたてでなくとも、スタート時点から子どもらのボルテージは高い。こういう意味において、異年齢の子どもが一緒に生活するというのはとてもイイ事だと思います

そして、そんなに急いでうまくならなくてもいいというのも大切なことだと思います。ひと月やそこらでは、太鼓はとりあえずたたけるようになるけど、オモシロさの域には到達しない。課題じゃなく、ちよつとめんどくさくつてもしんどくても「遊び」でなくちゃ。子どもらはよく言うでしょ。遊んでる最中に……「○○ちゃんあそびなやー!」。そうあれ。遊ぶのは真剣なんです。

(大阪・東田辺かぶとむしクラブ)